可きは勿論、女子としての義務を盡さなければなりません、極言すれば女性は兎角身を誤り易いから、結婚する前には極めて周密な注意をして、詰らぬ事に耳を傾けず、又他人に煽動されないやうにして、良緣を索める事が大切です、最後に花嫁が夫に對する注意をざつと云て見ますと、

一、善く貞操を守り、苟にも愛を二三にす可ず

二、夫の業務を知り、苦心を察し、嗜好を慮り慰藉に勉めよ。

三、能く內を治め、夫をして內顧の憂いなからしめよ。

四、敬を守り、愛に褻なる可らず。

五、些細の事に悲み嘲ち、不快不幸をもらす事ある可らず。

六、家庭の秘事を語る可らず。

七、熱誠を盡せ、假りにも冷淡なる可らず

八、嫉妬は惡しからずと雖も、其度を過せば愛を損じ、害を釀す事あり。

九、心に無念と思ふ事ありとも、外に對しては夫の面目を保て。

（時事）

感じたるまゝ

樂天子

世の兒童を敎育すると云ふことは、只口の先でいふて聞かすといふばかりのものではありません、平たくいへば見習はせると云ふことが大部分含まれて居ります、そこで小學校の先生杯は、いくら學者でも、小供を見習はせるに適當な人でなければ駄目です、口のきき方が柔しく綺麗で、人の扱ひ方が上手で、起居動作から氣質までが、悉く見習ふに足る先生でないといけません、殊に幼稚園や尋常一年の先生は格別さうなければならぬ、幼稚園に入れやうといふお方が數の數へ方なりとも、今頃から覺えさせて學校に上る時の補助にしやうとか、家庭で、八釜しいから只遊ばせにやりたいと云ふやうなお考だと、大變な間違なのであります、又子供を充分見習はせるに足る幼稚園をお選びになりませんと、四五才六七才までに見習つた事は中々改めやうとしても六ヶ敷のであります、

ですから幼稚園で少し活潑過ぎるやうに育つた子供は學校では實に先生泣かせであります、そこでよくない幼稚園ならば寧ろ入園させぬ方が子供將來の爲めになります、是等に就ては面白い實例もあり、又私の數年間の經驗を踏むで來た事であります。

斯く述べしごとく幼時の見習子供の腦裡に映ずる事と云ふものは實に恐るべき程のものであつて、まだ二つである、三つにならねば何にも分らぬ、口も利けぬ内から、善惡の言ひ聞かせや、行ひ方などが分るものかと云ふ樣な間違は多くの家庭に有り勝な事柄であつて、之が即ち子供保育の上に大間違を來す根本的源因であります、皆樣が御承知の通り近來は胎内教育といふことさへ盛んに申すではありませんか、胎兒が親の思慮感情動作までを感染して離體するといふではありませんか、教育學上でも八ケ間敷い問題なのであります、なとか眼より映じ、耳より應ずる年余を經過生育したる幼兒に於て、感應なしと云ひ得ませうか、目から映つて眞影された父親の動作とか、耳から應じて彫み込まれた母親の言語とかいふものは誠に新しき柔かなる幼兒腦裡の影寫盤に、濃く明晰に深く巧妙に、映り、彫まれて、小學時代から中學高等女學校時代と、追々に、其の寫された者は、幻燈となり、活動寫眞となつて現はれ、其の彫み込まれた者は之が即ち蓄音器となつて現はれるのであります、無意識の内に注入された事は又無意識に現はれ出るのでありますから實に恐ろしい事であります。八つ頃から十才以上となつて少しは物の善惡長短が分つて來てから見たり聞いたりした事は、惡い事と思へば行はぬのでありませう、夫でも良くない事は見せぬがよい、聞かさぬがよい、惡い事だと必ず蔭で行つて見たがる、好奇心に富むで居る子供には中々其督監は六ケ敷のであります、だからして良くない事を見たり聞たりした時には充分戒めて、人たるものゝなすべき事でないと云ふことを會得せしめ、且つそれらの眞似をすると結果がどうなるといふことまで充分承知させて、善惡の境目を明にせねばなりません。以上子供の目や耳に入る事柄に就いては、充分注

意しなければ、中々人間といふ人間は育てられぬものであります、能く無い習慣の多くは兩親から見習ものである、私は平伏して新聞を見る惡習慣があります、所が今年三才になる小兒が繪本を見るに必らず平伏して見る、妻がいけませぬと叱れば『トウチヤマガ』とやらかす、父樣の眞似をして夫れが本統の讀み方、見方と承知して居る、實に驚き入てこの頃は成るべくと我慢致しますが、必ず子供は見習ふもので誠に恐るべきことであります、自分は寢て讀んで子供に起きて讀めと敎へられるものではない、無理な注文である、之が口で敎へると云ふので最初述べました樣に効力のない敎へ方でどうしても子供の前では見習はすべく矢張り旦座して讀んで見せねばならぬ、子供を持つた父や母、又は多人數を敎育監督するものは仕方がない、夫を出來ぬとなら子供を造らぬがよい、親たる資格がない、敎育者監督者たる資格がないと斷言するに憚らぬのであります、下女が起きて御飯の仕度から愛兒の世話、且つは學校行の用意までする、中流以上の家庭にも澤山ある、この家庭が其の愛兒成長の後に親の名譽、家の資格を汚す人物を作り出すのであります、寢床の中から下女に命を下して『時間だよ若樣に御飯をお上げよ、おかずが間に合はねば上の戸棚に鑵詰が買つてあるよ』と御命令の下るのを私は聞た事がある、私はかゝる家庭が間々あることを信じますが、之等が皆親が子に將來の不品行を敎ふるもので、元來下女といふものに我愛子を託して學校行の準備までをさすべき者でない、大切な子の頭腦を作るために出掛ける準備などは親が直接にしてやつて、能く敎はつてお歸りよと一言の重味をつけて送り出す位でなくては子供の頭に何が止りませう、こんな事を輕薄に考へて、暖かい床の中から冷かな命令を發して間接に我子の世話をするやうな親達こそ我輩の目から見ると、玩具に作つた人形の樣で、下女をしてあやつらさせて、お樂みになさるやうに外見えませぬ、何も酷評ではありますまい。